

パンタナル通信

南北米福地開発協会 会報 2005年5月1日発行 第20号



田岡駐日パラグアイ特命全権大使を迎えての講演会 渋谷フォーラム8にて(4月24日)

田岡功駐日パラグアイ全権大使講演要旨文

一九五八年日本政府の奨励で、農業移住者として、父親と共に十四歳で（二ヶ
月の船旅をしてパラグアイに着いた。多分、父親は五十町歩（一町＝三〇〇
〇坪）の大地主になれるということで、戦後の荒廃した日本を出て、一旗揚
ようという気持ちだったと思つ。しかし、着いた所はジャングルだった。未
開の地の開拓は大変に困難が伴つたが、父は「日本人としての誇りを持て！」
とよく言られた。二十五歳で結婚、その半年後に父が亡くなつてしまつた。
パラグアイの人々は分かち合つ暖かい心を持っている。私は徳島で生まれ育つ
たが、戦後の貧しい日本でも、隣のおばさんがトウモロコシを焼いて、幾つ
かに切つて、自分の子と同じように分けてくれたのを覚えている。
開拓から日本人移住地を中心にラバス市として育てながら、そこで一八年間、
市長をしてきたが、昨年、大統領から日本大使の要請を受け、国会も満場一
致で承認してくれた。それは日本人田岡としての評価を受けたのだ。パラグ
アイと日本の架け橋をどの様にやるかという時、日本に来て皆様のように既
に実践している支援団体があることを知つて本当に嬉しく、心から感謝申し
上げます。

日本は食糧の六〇%以上を外国から輸入していますが、中国もそう遠くなく、日本への輸出が出来なくなります。そうなると日本は南米への関心も高まつて来ると確信します。国民同様に分け隔てなく移住者を受け入れてくれたパラグアイに恩返しをしたいと日本政府に訴え、パラグアイへ凍結して三五〇億円、四年間融資等を了承してくれました。日本の皆様に感謝します。パラグアイはまだまだ教科書やノートも買えない貧しい人たちが沢山居ますが、日本人を信頼し、親しく迎える心の温かさはあります。

移住地で半世紀、日本人として持つて来た誇りが、帰国してみると失われて、いることに日本の将来を心配します。他人に無関心な、労りのない若者をどう転換させていくか、パラグアイの大自然の中に連れて来て、日本を振り返

五月予定
二日研修会（事務局会）

南北米福地開発協会事務局

神奈川県川崎市溝の口二

る時、大きく変革してくれるのではない
か。メルコスールと共に観光にも力をい
れ始めましたので、沢山の人々が訪れて
下されることを期待し

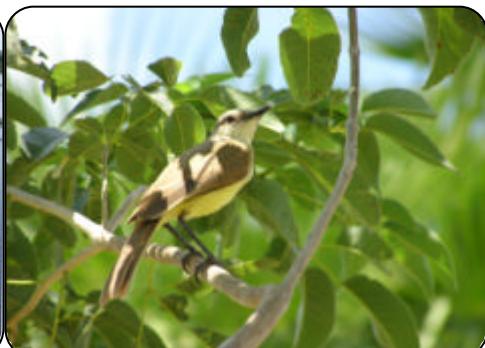
(文責：飯野)

ファックス 電話
○四四一八八九
一一八一一〇

質問「パラグアイ人の国民気質は?」
大使「パラグアイは大半がスペイン人と混血。財布をにぎることはありません。旦那さんが財布を握り、買い物に行く時は通常、夫婦で行き、奥さんが求めた物を旦那さんが財布を出して、お金を払いお釣りも旦那さんが管理する。ドイツ系の方も多く居ますがドイツから移住したというより、ブラジルに移住したその子孫がパラグアイに移住してくる。ドイツ系は自分で鶏、牛を飼い自分で自活する体制を整え、生活力がある。しかし、パラグアイ人の傾向として、毎日をその日、暮らしで、自活する能力が欠けている傾向がある。それは教育が不十分であるからかもしれない。今日、腹いっぱい食べきれないとほど食べ、次の日に食料がなければマテ茶で朝も昼もすごすこともある。しかし、土地を何百、何千町歩持ち、牛を何千頭、何万頭飼う牧場の大金持ちはプライドが高く、現地の働く人を決して家に入れたりはしない。とても厳しく、人夫として扱い差別待遇をする。移住地では日本人の場合、誰であっても、家に上げ、温かく迎えるのが通常である。」



会員の質問に応えられる田岡大使。



レダ近郊の最近の自然

新しい厩舎と牧童達の宿舎の完成 (2005年3月)



新しい厩舎（馬小屋）がすてきです。馬の部屋には香りいっぱいの干草がしかれ、馬たちはもうずっと昔からそこに住み着いているかのように、落ち着いた顔をしています。行くと、顔を出してやさしい目で見返してくれます。これからは馬小屋に行くのが楽しみになります。今、厩舎の東側にアランブレを張り、馬場を作っています。皆様がレダにおいてになられたとき、すぐに馬を連れてきて、乗つていただくことができるようになります。（小田記）